

「経済学コア6」による2年次までのテーマ学習と演習の充実

The Theme-Based “Economics Core 6” Program for First Two Years and Seminar Enrichment

児島完二* 伊澤俊泰* 木船久雄** 秋山太郎* 阿部太郎*
家本博一* 大石邦弘* 河原林直人* 黒田知宏* 佐々木健吾*
*名古屋学院大学経済学部 **名古屋学院大学

Abstract: Although NGU students of economics could increase mastery of subject matter through interactive learning by ICT, their analytical skill was deemed insufficient. To correct this insufficiency and boost student problem-solving skills, we introduced a theme-based learning program called “Economics Core 6” (EC6) for all freshmen and sophomores. The aims of the two-year EC6 follow: 1) increased interest in economics; 2) improved study skills; and 3) maintained or better motivation to learn. The EC6 program develops interest in economics through familiar topics. Many online quizzes and explanations in the six fields of economics foster the learning of basic economic concepts and principles. Students aim to complete all topics and are assisted by cooperative activity and even competition with their fellows. By establishing a solid study foundation in two years, we expect almost all students to determine their own future career path and choose appropriately their junior and senior seminars on their own. Furthermore, we organized various educational events like the “Core 6 Competition,” which helps clarify and enrich seminar content. From four years of this consistent educational program came a distinctive ICT educational method.

Keywords: theme-based learning, transparency in educational process, enrichment of seminars

1. はじめに

名古屋学院大学経済学部のカリキュラム・ポリシー^[1]は、「経済社会に関する基本的理解と関心を高め、社会を洞察するための知識と判断力を育み、課題発見・解決型の能力を養成する」ことである。これらの能力は主に学科に配当された授業科目および演習で養成される。演習は表1のように1年から4年の各学年（1学年定員：450名）の必須科目として設置され、卒業要件としてゼミでの卒業論文の作成・提出を義務付けている。

授業科目での課題は、大学生の基礎学力の

表1 学年毎の演習概要

学年	科目名称	単位	備考
4年	専門演習	12	卒業論文
3年			研究報告書
2年	演習	4	
1年	基礎セミナー	2	春学期のみ

Kanji Kojima*, Toshiyasu Izawa, Hisao Kibune, Taro Akiyama, Taro Abe, Hiroichi Iemoto, Kunihiro Ohishi, Naoto Kawarabayashi, Tomohiro Kuroda and Kengo Sasaki Nagoya Gakuin University
*E-mail: kkojima@ngu.ac.jp

多様化が進行したことであった。この対応はLMSを活用した繰り返し学習を学部で組織的に取り組むことで一定の成果が得られた^[2]。しかし、依然として経済学的な思考が深まらず、政策提案はおろか課題の発見にも至らない。その原因には、知識レベルにバラツキがあり、獲得した知識は体系化されておらず、科目間の知識連携が不十分であることが挙げられる。

このように経済学での課題発見・解決に必要な基礎が不十分なので、3年次以降の演習で深みのある議論ができない。したがって、教員はゼミで必須の研究報告書（3年）や卒業論文（4年）の指導が困難であるという問題に直面している。また、ゼミの運用課題として、1ゼミあたり人数が過多（表2参照）で偏りがあること、ゼミごとにレベルや到達目標がまちまちであること、運営がブラックボックス化していることなどが挙げられる。現状では、教育効果の高いゼミとそうでないゼミが混在しており、低学年（1・2年）の

ゼミでは学部共通の経済学教材を活用した緩やかな平準化が求められる。

表2 1・2年生のゼミ数と収容定員

年度	1年ゼミ数(定員)	2年ゼミ数(定員)
2013	27(15~18名)	36(16~20名)
2012	26(10~15名)	33(19~21名)
2011	27(15~19名)	29(21~23名)
2010	30(18~25名)	31(21~24名)
2009	27(18~21名)	29(21~24名)

経済学部のカリキュラム・ポリシーを4年間でいかに達成するかが大きな課題となっている。そこで学部組織としてICTを利用して主体的学習者の育成を指向する。具体的には、経済学への興味・関心を喚起し、学習意欲の持続と学習習慣の確立を目標とした。最終的に課題発見・解決型教育の実践として卒業論文の作成指導にあたる演習の充実を目指す。以下では、経済学部の組織的な取り組みを紹介する。

2. テーマ学習の内容と方法

4年間の教育課程で学士力を達成するため、学部の教育目標を前／後期の2年ずつに分けた。前期の1・2年次ではテーマ学習から経済学的思考力の基礎を確立する。後期の3・4年次では専門演習を中心として、課題発見から研究調査の発表や議論を通じて卒業論文を完成させる。

前期の目的を達成するため入学後から2年次修了までLMSでテーマ学習を実施する。学期末試験期間(7月、1月)を除く20ヶ月にわたり継続することで、学習習慣を身に付けさせるという狙いも持つ。

テーマ学習では、経済学への興味関心を喚起するため、18歳から20歳頃の学生が遭遇する身近な経済事象を取り上げている。例えば、1年次2月では「保険と期待損失」として次のような状況を想定した。「自動車の運転免許を取得した。早速、自家用車に乗ろうとしたが、親に保険の手続きが済むまで待てと言われた。」ここでは、学生が自動車運転

免許を取得することから話題を展開し、万一の事故に備えた保険の必要性、金融の仕組みや保険業について考える機会としている。この学習で興味が湧いたら、3・4年次で金融のゼミを選択し、自らの関心を深める。そこで卒業論文の課題を発見して、研究に集中する。

表3 学習テーマ一覧

No.	出題月	学習テーマ
1	4月	教育と機会費用
2	5月	地域経済と就業構造
3	6月	為替と北米事情
4	8月	港湾の機能と地域産業
5	9月	銀行と信用
6	10月	技術革新と景気変動
7	11月	金融と金利
8	12月	貯蓄と期待値
9	2月	保険と期待損失
10	3月	情報の非対称性と交換
11	4月	エネルギーと装置産業
12	5月	市場機能とイベント効果
13	6月	開発途上国と貿易
14	8月	喫煙と規制
15	9月	商店街と資本集積
16	10月	個人資産と地域ブランド
17	11月	年金制度と国税
18	12月	競合と統合の欧州
19	2月	不動産をめぐる諸問題
20	3月	農業自由化と日本

上記の20テーマに関して経済学のコア分野である①経済理論、②経済政策、③経済事情、④経済史、⑤データ処理、⑥法・制度の6分野⁽¹⁾の観点からそれぞれ解説した教材を作成した。複数の授業科目で扱う内容をテーマで串刺しにするイメージである(図1参照)。

表3のような20ヶ月の学習テーマを設定

図1 「経済学コア6」のイメージ⁽⁴⁾

して、関連設問（6分野×10題×20ヶ月＝1,200題）を教員で作成した。出題形式は、択一式のほか複数選択や穴埋め式⁽²⁾も可能とした。Webでの自学自習教材とするため、学習の狙いやまとめを教員が動画クリップで解説⁽³⁾したり、既存の共通テキスト⁽⁴⁾など学部内の教育資源を有効活用したりした。そして、学内のLMSに「コア6演習」を新たに構築し、PCやスマートフォンから学習できる環境を整備した。

学生の学習意欲を持続させるために様々な工夫を凝らしている。柔らかな画面構成とし、マルチメディアを多用して理解度が高まるようにした。学習ナビゲータにはキャラクター「コア博士」を登場させ、楽しく学習する環境とした。学習量の可視化では、数値やグラフで成果（成長）を確認し、達成度にフェイスマークを使って既習・未習の分野を一瞥できるようにしている。最終到達目標を分かりやすくするためにポイント制度を採用した。毎月の課題を完遂すると5ポイントが付与され、2年間の合計100ポイントを目指す。学年順位などを示したり、通信講座のように期間内に基準ポイントを達成した学生には褒賞（特製グッズ）を与えている。達成感とともに上述のようなゲーム感覚を活用している。



図2 「コア6演習」の学生画面

演習での活用を促進する機能として、ゼミ仲間の進捗状況を示し、他者を意識させている。例えば、同じゼミの学生が一つの分野を完了させると、他のゼミ生の画面には「ひと

りが××の分野を修了させました」と表示される。また、クラスアドバイザーであるゼミの担当教員は学生の進捗一覧（図3参照）をチェックできる。そこで、学生へのアプローチ支援機能として、LMSに教員からの激励コメント（定型文と自由文）が簡単に送信できる仕組みを用意した。

学籍番号	氏名	分野別進捗状況						2月の成果		学生にひとこと		最終送信日
		経済学	法学	経営学	社会学	政治学	国際関係学	分野別進捗状況	コメント	定型文送信	自由文送信	
16E0001	赤名 太郎	完了	完了	完了	完了	完了	完了	0/6	0	送信		12/23
16E0002	山田 花子	完了	完了	完了	完了	完了	完了	0/6	0	送信		11/27
16E0003	田中 一郎	完了	完了	完了	完了	完了	完了	0/6	0	送信		12/20
16E0004	佐藤 美咲	完了	完了	完了	完了	完了	完了	0/6	0	送信		11/28
16E0005	鈴木 健太	完了	完了	完了	完了	完了	完了	0/6	0	送信		12/21
16E0006	高橋 明日香	完了	完了	完了	完了	完了	完了	0/6	0	送信		12/20

図3 「コア6演習」の担当教員画面

以上のような取組を組織的に進めるため、2009年に学部内に特色教育推進委員会（以下、推進委員会）を構成した。

3. これまでの組織的活動とその成果

2010年度からテーマ学習「経済学コア6」がスタートし、1・2年生へ向けて毎月10日には当月の課題がLMSから提示される。学生に対して単位化・必修化しない長期におよぶ学習プログラムなので、実施前より取り組みの成功が不安視されていた。そこで、表4のように推進委員会は20ヶ月の教材作成とともに、活用データの振り返りによる迅速な改善や教育イベントの導入などを実施した。

表4 組織的取り組みの変遷

年度	実施内容
2009	「経済学コア6」立案 推進委員会の構成、システム開発
2010	コンテンツ（設問・ビデオほか）作成 1年目実施（10ヶ月分完成）
2011	2年目実施（10ヶ月分完成） 2年ゼミ対抗コア6コンペ開催
2012	コア6コンペ（2年ゼミ対抗、1年コンペ） 利用者インタビュー、コンテンツ見直し

こうした組織的な活動により、年々、利用率の向上が確認されている。図4は年度別の1年生の取り組み状況を示したグラフである。春学期（4月～6月）を見ると初年度に比べて徐々に利用者の増加が窺える。また、

初年次演習の基礎セミナーは春学期の半期科目なので、8月以降の利用率が急激に落ちていた。しかし、2012年度は明らかに違う傾向を示している。これは、1年生の秋学期にコア6コンペを実施した効果である。

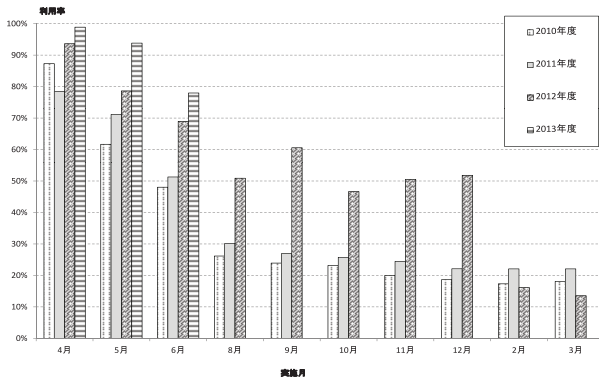


図4 年度別1年生の利用率

推進委員会では、毎年10%の利用率の増加を目標に活動している。2012年度における全体の利用率は前年比で11.5%向上した。また、学期末時点で獲得ポイントを集計し、新学期の始まりに褒賞式を開催して学生を表彰している。表5のように下の学年へ進むに従って、褒賞対象者は増えている。

表5 ポイント達成（褒賞対象）者の推移

ポイント	4年生	3年生	2年生
100pt	24	41	—
75 pt	44	77	—
50 pt	26	74	30
25 pt	58	76	110

2012年3月には2年間のテーマ学習を終えた学年が誕生した。そこで、彼（女）らに対してコア6に関するインタビューを実施し、以下のような声を得られた。

- ・ゼミや学年での順位がやる気につながりました。
- ・先生のコメントがもらえるのも嬉しかったです。褒められたり、アドバイスをもらえたりすると難しい問題も頑張ろうって思えました。
- ・私の周りではコア6の話になることがよくあり、友人と順位を競い合ったりするのも楽しいです。

これらの声はWebサイト^[5]で公開すると

もに、取り組みの振り返りや評価の材料とした。

今春、新入生へ4度目となるプログラムがスタートし、ようやくすべての在学生在がテーマ学習を経験するに至った。その間に学内関係者もコア6の教育的意義を理解し、今や学部根付いた特色あるICT教育^[4]の一つとなっている。

今後も学習データに基づいた改善を継続する。その一つは、設問の質のさらなる改善である。このシステムは、学生が設問を評価（3段階とコメント）できるようになっている。これらの評価データと1,200問に付帯した正答率を参照して、推進委員会が設問の適切性を検証している。

4. 演習の充実とその確認

ICTによるテーマ学習の到達度の確認と演習の充実に向けて、2年次ゼミで「ゼミ対抗コア6コンペ」を2011年から開始⁽⁵⁾した。具体的な実施方法は以下のようなものである。まず、推進委員会が既習範囲から180題を精選し、出題用の設問群を構成した。2年次12月のゼミ時間の一部（15分間）を使い、LMSで小テストを実施する。ゼミごとにランダムで30問が出題され、ゼミ生の得点で競う。30程の参加ゼミをランキングし、最優秀であったゼミを教授会内で表彰した。個人戦として優秀な学生にはメダル（金・銀・銅）を授与し、参加者全員に参加賞を与えた。

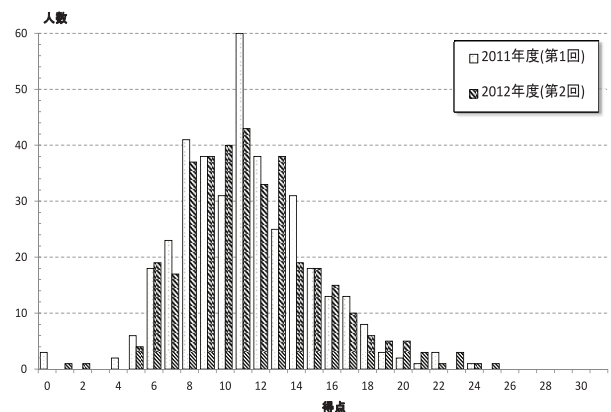


図5 ゼミ対抗コア6コンペの成績分布

2012年には全33ゼミが参加し、図5や表6のような結果を得た。前年に比べて学生参加率や平均点などの向上が確認された。散らばりが大きくなり、全体が右へシフトしている。ゼミ対抗コア6コンペは卒業研究発表会などと同じように、学部独自の教

表6 ゼミ対抗コア6コンペの成績

年度 (回)	2011年度 (第1回)	2012年度 (第2回)
平均点	11.2	11.5
標準偏差	3.61	3.79
最高点	24点	25点
参加者	378名	358名
受験率	78.3%	82.2%
表彰条件	21pt以上	23pt以上

育イベントの一つに定着しつつある。

ゼミ対抗コンペによって、懸案であったゼミ内容の一部が可視化された。どのゼミがテーマ学習に積極的に取り組んでいるかや、全学生へ配付したノートPCを実際に活用している実数（16ゼミ）が把握できた。また、LMSの機能を実際に利用し、教員が操作することはFD活動につながっている。成績上位のゼミ名のみでの公開であったが、教員内にも少しずつ意識の変化⁶⁾が見られる。到達度の測定と透明度を高めた結果、ゼミの学習教材に「経済学コア6」が徐々に利用されるようになっている。

5. 今後の発展性と展開

経済学部で学士力を達成するためには、4年間の教育課程が有機的に機能しなければならない。学士力は講義のみならず、演習や課外活動などを通じて培われる。これまでFDは主に個別の授業が対象であった。本取り組みではそれに加えて、教員や同級生との関係が密である演習に焦点を当てた。経済学部教育でのテーマ学習の有用性と今後の発展を探った。

(1) アドミッション・ポリシーでの活用

経済学部への進学理由を調査すると、消極的な動機で入学する学生が多い。高校時代に経済学部で必要となる教科に精を出さず、カリキュラムへ関心を払うことなく、自分の将来をイメージできないまま入学する学生が少なくない。テーマ学習コンテンツは、経済学はどのようなものであるかを具体的に示す事例であり、学部選択のミスマッチ解消に役立つ。例えば、高大連携事業での素材として、高校生に興味あるテーマを選んでもらい、クイズや解説などから経済学の考え方を紹介できる。

(2) カリキュラム・ポリシーでの活用

入学動機が弱い学生に対しては、授業を分かりやすくするという努力に加えて、経済学は面白く、役に立つことを実感させるのが重要である。さらに、自分の将来との関わりを理解させ、内発的な学習意欲を喚起するのが有効である。実際に大学で経済学を習ってもどのような学問かをイメージできない学生も多い。そこで、教室だけでなくICTでのテーマ学習という異なった視点で理解させる。

また、自分の関心が強い分野のゼミへ進級させるとともに、課題解決型能力の訓練が必要である。これにはテーマ学習で用意した6分野のアプローチ方法が役立つ。「経済学コア6」は3・4年でも再利用できるので、専門演習で卒業研究を進める際に、適宜（分野別、テーマ別）復習するといった用途がある。学部には多数のゼミがあり、活動内容や成果も多様である。ゼミのパフォーマンス向上には、まず演習の可視化が必要である。学生が自分に相応しい演習を選択できるためにも詳らかにしなくてはならない。各種教育イベントやLMSの参加データからゼミのパフォーマンス調査が可能である。ゼミの仲間同士での助け合いや競い合いが重要で、ゼミを活動単位とする学部の教育イベントは相互に影響を与え、学部教育の活性化に極めて有効である。

と考える。

(3) ディプロマ・ポリシーでの活用

専門演習で卒業論文を作成するには、課題発見から解決への経済分析能力が試される。研究成果を発表するのはコミュニケーション能力を磨く貴重な機会である。これらは学士力を養成する一つの重要なプロセス⁽⁷⁾である。また、10年以上継続されている卒業研究発表会への出場は個々の学生の能力を大きく向上させ、ゼミの教育力を紹介する場でもある。さらに、卒業論文の質保証を進めることは、将来的課題である学位論文のWeb公開の準備にもつながる。

学士力を質保証する一つの取り組みとして、アチーブメントテストを視野に入れる。学部全教育課程の到達度を測る共通のモノサシを教員は誰も持っていない。ICTでのテーマ学習は全学生が等しく学ぶ教材であり、回答履歴データから設問の質を吟味できる。必須項目に関するテストを作成し実施すれば、修了前の到達度を測定できる。

取り組み全体の効果について、現時点では最初の学生が4年生なので、学士力の到達にどの程度寄与したかは今後の研究を待たねばならない。今年度末に修了予定の学生や教員へのアンケート調査を実施し、効果を明らかにする。

謝辞

本取り組みに協力いただいた経済学部の1年次「基礎セミナー」担当者、2年次「演習」担当者に感謝する。また、コンテンツ作成やイベントの実施などで全面的なサポートをいただいた学術情報センターに深謝する。

注

- (1) 6分野の分類は、参考文献[3]の「経済学教育における学士力の考察」で一般性が見られる。到達目標(1～4)に6分野が垣間見られる。
- (2) LMSでのクイズ出題形式は択一式のみで

あったが、穴埋め式まで対応できるようにした。

- (3) 教員がビデオで解説することはShowcaseの役割を果たし、学生にとってゼミ選択時の判断材料にもなる。
- (4) 自習や授業内での活用を支援するために2009年春に冊子『経済学部生のための基礎知識300題』を作成した。以来、共通テキストとして全新入生に配付している。サイトでは電子版や主要経済データのダウンロードもできる。
<http://www2.ngu.ac.jp/economic300/index.html>
- (5) 推進委員会でゼミ対抗コア6コンペの実施計画を立案した。教務委員会が原案を了承した後、教授会で報告された。
- (6) ゼミでコンペ対策をしたいというニーズがでてきたので、LMSにある自学自習に経済学コア6の問題集を用意した。
- (7) 研究調査・論文作成・発表では、Web・ワープロ・表計算・プレゼンソフトの実践的利用が必須で、総合的なICT活用能力が求められる。

参考文献および関連URL

- [1] 名古屋学院大学経済学部の教育ポリシー、
<http://www.ngu.jp/faculty/university/economics/fac-policy.html> (2013年9月3日参照)
- [2] 児島完二, 荻原隆, 木船久雄: 経済学基礎知識1000題による学部教育の標準化と質保証. IT活用教育方法研究, Vol.9, No.1, pp. 11-15, 2006.
- [3] 私立大学情報教育協会: 『未知の時代を切り開く教育とICT活用』, pp.8-84, 2012.
- [4] 名古屋学院大学公式Youtubeページ。
<http://www.youtube.com/user/NagoyaGakuinUniv>。【経済学部の取り組み】ビデオ (2013年9月3日参照)
- [5] 教育GPコア6最初の2年を終えて。
<http://www.ngu.jp/gp/report/index.html> (2013年9月3日参照)